

久山町，福岡市周辺におけるこどもの 心身の発達と母子相互作用

黒川 徹，松尾 誠，
吉田 敬子（九州大学小児科）

小島 誠子，佐伯 昭代，
石橋 薫，伊藤 許子
（母子衛生研究所福岡支部）

1. 久山町乳幼児の心身の発育と育児環境

1) 肥満度と育児環境：肥満度は社会的経済的
家庭的環境によって左右されることが知られてい
る。久山町においては一家当りの人数が少ないもの
は肥満の傾向があった。祖父母の同居する家族で
は家も広く運動量も多く，母親は農作業等に出，
祖母と遊ぶことは間食をしない。一方，二世代
のみの核家族では，昼間は母と子のみで，狭いア
パートに住み運動量は少く，母親ともに対話の一
環として間食していることが推定された。

2) 幼稚園児の発達と育児環境

久山町においては3カ月，6カ月，1才半，3
才の健康診断時に遠城寺式発達検査がなされてい
る。今回は就学前幼稚園児105名全員を対象に
さらに河井式言語発達診断検査，ITPAを施行
し家庭環境との関係をみた。1才時の発達は祖父
母の同居と無関係であった。3才における発達は
1人っ子が良好で就学前の語り指数も昼間の保育
者が母親である場合がもっとも良い傾向があっ
たが，他に比して有意差には至らなかった。一方，
発語が早いものほど歩行開始も早く，就学前の語
い指数も高かった。すなわち幼稚園までの発達は
環境よりも生来的要素がもっとも強く関与してい
た。

2. 福岡市・北九州市の乳児健診，妊婦講習会 のアンケートから

1) 乳児の体重と母子関係：Klans は未熟児
の母親は罪悪感を抱くことを報告し，ソ連では未
熟児は養子に出される率が高いといわれている。
われわれは乳児の体重と母子関係の相互作用につ
いて調べた。対象は母子研の4カ月および1才半

健診に来た200名である。この年令の体重の標
準偏差は800～1,200gであり，I群は健診時
体重が標準体重より1,001g以上重いもの，II群
は標準体重±1,000g以内，III群は1,001g以
上軽いものとした。その結果I群は第1子で切望
された後生まれ，出生体重が大きく，分娩後対面
したとき嬉しく思ったものが多かった。また乳を
よく飲み，発育が順調で嬉しく思い，人工栄養も
適宜用い，家の中は明るく，テレビもつけ，近く
に子どもを預けられる祖父母がいて，母親が子ど
もに語りかけることばも陽性であった。一方III群
では第2，3子で出生体重が少く，対面したとき
実感がなく，「また男(女)か」といった感情が
多かった。発育について心配しているにもかかわらず
母乳で通し，人工乳を節約せざるを得ない家庭も
あった。哺乳量も少く，家庭は寂しく，テレビ
をつける時間もやゝ短い。父親は育児に振向か
ない群と心配して熱心な群の両極端があった。語
りかけることばは「大丈夫?」といったようなもの
であった。すなわち乳児の体重と母親の養育態
度は相互作用を有するという結果が得られた。

2) 妊婦の母親意識：母親の学歴，年齢差によ
って母親意識がどのように違うかを調べた。中学
・高校卒では結婚は自分が希望してきたものが多
く，22～23才頃に出産していた。出生後は哺乳
は規則正しくしたいと計画していた。社会に出
て働きたいが母親業に専念せざるを得ないと考
えていた。短大・大学卒は25才以上の比較的高年
出産が多く，結婚も自分はそうでもなかったが相
手が切望するので来てやったと感じているものが
多く，出生後の授乳は児の要求に応じて与えたい
と計画していた。また母親として育児に専念した

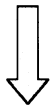
いと思っているものが多かった。なお出産年齢が
才以下の低い群と 才以上の高い群では自分の
育ってきた実家の環境は必ずしもなごやかでな
かったとしているものが多かった。

3. てんかん患児の親子関係と行動

1) てんかん患児の親子関係：てんかん患児の
親の悩みはかってもっとも強かった社会的偏見も
さること乍ら現在では薬の副作用に関するものが
もっとも多かった。発作治癒の見通しが立たない、
知能低下の恐れ、あるいは進学、就職、結婚など
将来に対する不安が強かった。

2) てんかん患児の行動と親子関係：知能正常

の4～13才のてんかん患児114名、対照として
久山町の同年齢の子ども534名についてRutter
の行動異常調査表、田研式親子関係診断を用
いて調べた。その結果、注意力散漫、親に反抗的、
忍耐力の欠如、不安などあらゆる面の行動異常が
てんかん児により多くみられた。親は溺愛と不安、
干渉の傾向が強かった。これらの子どもの行動異
常、親子関係の歪みはてんかん初発後1年間がも
っとも強く、発作コントロールの得られていない
難治例で持続していた。一方発作コントロールの
得られた群では改善し、久山町対照児と差はなか
った。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 久山町乳幼児の心身の発育と育児環境

1) 肥満度と育児環境: 肥満度は社会的経済的家庭的環境によって左右されることが知られている。久山町においては一家当りの人数が少ないもの、祖父母が同居せず昼間の世話役が母親であるものは肥満の傾向があった。祖父母の同居する家族では家も広く運動量も多く、母親は農作業等に出、祖母と遊ぶこどもは間食をしない。一方、二世代だけの核家族では、昼間は母と子のみで、狭いアパートに住み運動量は少く、母親ともに対話の一環として間食していることが推定された。

2) 幼稚園児の発達と育児環境

久山町においては3ヵ月、6ヵ月、1才半、3才の健康診断時に遠城寺式発達検査がなされている。今回は就学前幼稚園児 105名全員を対象にさらに河井式言語発達診断検査、ITPAを施行し家庭環境との関係をみた。1才時の発達は祖父母の同居と無関係であった。3才における発達は1人っ子が良好で就学前の語り指数も昼間の保育者が母親である場合がもっとも良い傾向があったが、他に比して有意差には至らなかった。一方、発語が早いものほど歩行開始も早く、就学前の語り指数も高かった。すなわち幼稚園までの発達は環境よりも生来的要素がもっとも強く関与していた。